

水無月

石崎ナツ

石崎和子

石崎（山本）勝利

小笠原節

布川静夫

山本憲昭

市民1、2、3

老人

○ 勝利の幼少期 -----山中

山本「勝利」

勝利「・・・」

山本「ほんと、しょうがないやつだな」

勝利「・・・」

山本「どうして一人で海に行ったんだ」

勝利「・・・」

山本「勝手に行っちゃ駄目じゃないか」

勝利「・・・」

山本「助けてもらってなかったら、どうなったか分かってるのか？」

勝利、うなづく。

山本「死ぬとこだったんだぞ」

勝利、うなづく。

勝利「だって、お父さんに言ったら、行くなっていうだろう」

山本「馬鹿」

山本「海くらい、いつでも連れて行ってやったのに」

勝利「うそだ」

山本「そう言うって思ったからって、黙って海に行っていいわけじゃないか！」

勝利、涙ぐんでいる。

二人、ゆっくり黙って、山の中を進む。

徐々に雨が降ってくる。勝利、顔についた雨粒をぬぐう。

山本は、肩にかけたタオルで汗が混じった雨をぬぐう。

やがて、二人は、山の方をじっと見ている老人のそばを通りすぎていく。

老人「(小声で) ほら」

勝利だけが気づき、父親のシャツを引っ張る。

山本「？」

山本、振り向く。

老人は顎のあたりを触りながら、ニコニコと微笑んでいる。

山本「(勝利に) いこう」

勝利「でも」

老人、片方の手で手招きし、もう片方の手はやはり顎のあたりを触りながら、

老人「こっち、こっち」

山本「なにがあったんです？」

老人「こっち、こっち」

二人、老人の方へ引き返す。

老人「ほら、あそこ」

山本「ああ」

老人「狐の親子だよ」

山本「ほら（勝利に示し）」

勝利「うん」

老人「ほら、こっち見てる」

勝利「雨宿りしてるのかな」

三人、狐の親子を見つめる。

○喫茶店

ナツ、勝利、コーヒーを飲んでいる。

ナツ「勝利さん、今日は呼び出したりして、ごめんね」

勝利「いえ」

ナツ「お父さんも色々、大変みたいで…」

勝利「いや、僕は父のことはよく知らないのよ」

ナツ「あら、そう」

勝利「ええ。もう何年も、まともに話してないんです」

ナツ「あら、まあ」

勝利「ええ」

ナツ「この前ね、遠くから手をふったのよ」

勝利「ええ」

ナツ「そしたら、こう手を少しあげてくれたのよ」

勝利「そうですか」

ナツ「立派なひとだわ」

勝利「いや、そんなことはないですよ」

勝利「ただの道楽者です。ろくに稼ぎもしないで」

ナツ「まあ」

勝利「大学に行けたのだって、親戚のお金で」

ナツ「え、そうなの」

ナツ「まわりの人に助けられたのね」

勝利「ええ。父のせいで、いろんな人に迷惑かけたんですよ」

ナツ「感謝しないと」

勝利「父にですか？」

ナツ「感謝です」

勝利「はあ」

ナツ「ところで、和子とは、その後、どう？」

勝利「いや、まあ、それは、どうなんでしょうね」

ナツ「ほら、あるでしょう、なんか、違うかな、とかね」

勝利「ふふ」

ナツ「どう？」

勝利「うーん」

ナツ「どうなの？」

勝利「どうっていわれても、まあ、和子さんが、どう思うかっていうのもあるし」

ナツ「あ」

勝利「え？」

ナツ「それなら」

勝利「はあ」

ナツ「あのね、これはね、和子が直接言えないことだから、私が代わりにね、言うんだけど。」

和子だって、色々気にしているのよ。やっぱりね、ほら、勝利さんのお父さんのこととかね」

勝利「ええ」

ナツ「それでね、まあ、和子の代わりに言わせていただくと、はっきりいって、和子はあなたのことが好きです」

勝利「…」

ナツ「どう？」

勝利「…」

ナツ「納得？」

勝利「いや、まあ」

ナツ「お返事はね、すぐってことじゃなくって、全然かまわないの」

勝利「ええ」

ナツ「でも、ほら、私もいろんなひとの縁を結んできたんだけど」

勝利「はあ」

ナツ「やっぱり、自分の娘っていうのはね、違うもんですよ」

勝利「ええ」

ナツ「あ、でも、他の人の縁組を手を抜いたってわけじゃないのよ」

勝利「はあ」

ナツ「でね、やっぱり、和子はおとなしいっていうか、すこしゆっくりしたところがあって…」

勝利「ええ」

ナツ「ほら、上の子の恵子みたいにね、ががつがつしてたら、心配ないんだけど」

勝利「ええ」

ナツ「和子は病弱だしね、いい人がいないかって、ずっとそう思ってたのよ」

勝利「そうですか」

ナツ「そしたら、勝利くんがね、昔、同級生だっていう話を聞いて」

勝利「ええ」

ナツ「それでピンときたの」

ナツ「あなたは、すごく運がいいのよ。そういう星の下にあるっていうか」

勝利「え、なんでわかるんですか」

ナツ「いや、絶対、そう。わたし、わかるわ、絶対」

勝利「…」

ナツ「もちろん、無理にとはいわないわ」

ナツ「それと、主人。主人も喜んでます」

勝利「そうですか？」

ナツ「そう、そうよ」

勝利「それは、そうですか」

ナツ「まあね、政治家の家なんかね、なかなか独特でしょう」

勝利「ええ」

ナツ「だから、まあ躊躇することだってあると思うの、それは」

勝利「そうですね」

ナツ「だけどね、いや、だからこそね、そういう道にね、すこしでも興味あるならね」

勝利「ええ」

ナツ「あ、でも、これは、和子のこと云々、関係なくね、もしも興味があったら、ほら、事務所で少しお手伝いとか、ほら、この前の、小笠原さん、ご紹介した」

勝利「ああ」

ナツ「あの人に頼んだらね、なにかしらお仕事とか、それなりに用意してくれるから」

勝利「あ、そうですか」

ナツ「なにかね、困り事があったら言ってね」

勝利「はい、ありがとうございます」

ナツ「それから、和子のごことは、いろいろとあるのも重々承知しています」

勝利「ええ」

ナツ「まあ、でもね、縁っていうのもなかなかあるもんでもないしね」

勝利「ええ」

ナツ「私はね、前向きに考えて欲しいなって、考えてるんだけど」

勝利「はあ」

ナツ「やっぱりね」

勝利「ええ」

ナツ「和子のご思いと勝利さんのご思い、これがね」

勝利「ええ」

ナツ「やっぱり、重要なんですよ」

勝利「ええ、それは」

ナツ「ですよね」

勝利「ええ」

○市役所前（ダム建設反対運動）

山本、市民数人が市役所前でデモをしている。

のぼり旗を持っているもの、プラカードを持っているもの、鉢巻をしているもの。

拡声器を持った山本が演説を打っている。

山本「だいたいあなたたちは、ちつとも私たちのことを考えていないんです。今更ダムを作
ってなんのメリットがあるんですか！市の試算している 30 億円の利益ですけど、ダムを作
るのに借金が 3 倍かかるんです。つまり、90 億円。どこから出すんですか？これ、全部、
市の予算、つまり、私たちの税金ですよ。公共事業をやって、最終的にどこが儲かるのかっ
ていったら、一部の建設会社だけです。ダムを作る理由は、水道水を安定的に補給するた
めっていうんですけど、水道水、十分にあるんです。えー、近隣の県も含め、いままで水が
足りなくて困ったっていう例は、過去 30 年一度もないんですよ。いまあるダムだけで十分
足りてるんです。じゃあ、足りてるなかに、ダムを作って本当に意味があるんですかって思
いますよね。それで、市に対して少なくとも試算した中身見せてくださいよって。そしたら、
詳細な資料、すべて黒塗りです！いま、話題になっている、黒塗りですよ。市民をまったく
馬鹿にしていますよ。それで、私たちは陳情書を作って持っていった。市議会で取り上げてく
ださい。でも、なしのつぶてですよ。これなんでかっていうと、市議会議員、ほとんど利害
関係者なんです。（折りたたまれたプリントを広げ）字がちっちゃいな。えー、相原しまお
議員、やました幸平議員、牛山、牛川あつたね議員、川、川、川本まさむね議員、これら全
て議員は、ダム工事を請け負うとされている建設会社から、献金を受けています。この事実、
市民のみなさん、ご存じないんですよ！それでね、私たちが言いたいのは、そんな無駄なね、
ダムを作るにあたって、えー、15 戸のお宅が立ち退きしなきゃいけないんです。で、市は、
こう説明するんです。補助金あげてるから問題ないってね。だけどね、私も含めて、15 戸
のうち 7 軒のお宅はですよ、補助金の受け取りを拒否して、立ち退かないって言ってるん
です（そうだ！）。ここで、私はいいたい。ダム建設はひとまず立ち止まって、白紙撤回し
ましょう。これ以上作る必要のないものであれば、私たちの暮らしをこれからも奪わないで
ほしい（拍手）」

○競馬場

石崎和子、勝利、芝生を歩きながら、レースを見ている。

見晴らしのよいところで、立ち止まる二人。

和子「わあ。はやい、はやーい。(馬を指し) ねえ」

勝利「うん」

和子「うちの馬、そろそろかなあ」

勝利「ねえ、競馬には一着になる馬もいれば、まったく勝てないまま引退する馬もいるね」

和子「ん？」

勝利「人間にも一着になれるものがいれば、ずっとなれないものがある」

勝利「芝居でいうと、主役と端役って言葉があるでしょう」

和子「ええ」

勝利「主役になれる人間はほんの一握りだよ。その他大勢は、端役になるしかないんだよ」

和子「いや、人間ならだれもが主役になれるはずでしょう。そう学校で教わらなかった？」

勝利「(笑い) ほら、君のお父さんを見てみなよ」

勝利「ずっと勝ち続けて、市長という地位にある。でも、何度も負けた人間は、誰もその存在に気づかれないよ。たとえば、僕の父親がそうだ。市民運動に没頭して負け続けている。

一生、勝ち目のない戦いを続けているのさ」

勝利「ほら、賭けをしないか？」

和子「賭け？」

勝利「次のレースじゃないよ」

勝利「さっき僕たちの目の前を走っていった子供がいるだろう。あの子が主役になれるかどうか、賭けてみないか？」

和子「勝利さん、なに言ってるの」

勝利「ははは、冗談だよ」

勝利「ねえ、和子さん」

和子「なに」

勝利「僕のことが好きかい？」

和子、こくりと頷く。

勝利、和子の肩にそっと手をやり、耳元に近づいて

勝利「僕も、ずっと、ずっと、好きだったんだ」

○田舎の家の玄関先

市民1、ナツ、出てくる。

市民1、ペットボトルに入った水を持っている。

市民1「暑いところ、ありがとうございます」

ナツ「いや、こちらこそ。お邪魔しました」

ナツ「その水、飲むと肩が軽くなるのよー」

市民1「へえ」

ナツ「すーっと」

市民1「そうですかい」

ナツ「肩が楽になるから、試しに飲んでみてね」

市民1「ええ」

市民1「ナツさんも大変だねえ、いろいろと」

ナツ「ううん、そんなことないわよ。みんなに感謝されて」

市民1「彦兵衛さんも、そろそろ次を考えなきゃいけない頃でしょう」

ナツ「そうねえ。でも、あの人、70過ぎてますます元気なのよ」

市民1「へえ、そりゃ、心配ないね」

ナツ「そうなの、心配ないのが心配なくらい」

ナツ「あ、じゃあ、そろそろ」

市民1「いきますか？」

ナツ「ええ、また感想を」

市民1「ええ」

ナツ「ごきげんよう」

市民1「お気をつけて」

ナツ、去っていく。途中で市民2に出会い、挨拶をする。

市民2は野菜のはいった籠を背負っている。

ナツ「ごきげんよう」

市民2、会釈する。

市民2「ナツさん、外回りかい？頑張るねえ、暑いのに」

市民1「さっき訪ねてきて、水、置いてったよ」

市民2「もらったの？」

市民1「いや、買ったんだよ」

市民2「そうかい？」

市民1「あげられないんだって。寄付行為になっちゃうからって」

市民2「そうか、そうか」

市民1「肩が軽くなるとか何とか言ってたな」

市民2「ほんとかい？」

市民1「まあ眉唾だけど」

市民2「そんな、湿布みたいな水があるのかね」

市民1「義理で一回くらいは買ってみようかな、と」

市民2「そうか、そうか」

市民1「しかし、暑いねえ」

市民2「そうだねえ」

市民1「今年のお盆はどうするの？」

市民2 「ああ、うちの人と久しぶりに墓参り行こうって」

市民1 「お墓はどのあたりだったかね」

市民2 「海のほう」

市民1 「そうかい」

市民2 「ほら、解除されてからまだ行ってなかったから」

市民1 「ああ」

市民1 「立ち入りがねえ」

市民2 「そうそう」

市民1 「そりゃあよかった」

市民1 「ああ、ちょっと一服していくかい」

市民2 「いいよ、いいよ」

市民1 「ちょっと上がっていきな」

市民2 「うん、じゃあ、ちょっと一服」

市民1 「あがれ、あがれ」

市民2 「うん、それじゃ。籠ここにおいていいか？」

市民1 「うん、どこでも構わねえ」

市民2、籠を下ろす。籠からビニール袋を取り出して

市民2 「ほら、これセブンイレブンでお惣菜買ったんだけど、いるか？」

市民1 「セブンイレブンで、そんなもの売ってんのか？」

市民2 「ああ、セブンイレブンじゃ、なんでも売ってるよ」

市民1 「そうかい」

○政治資金パーティー

壇上には、秘書の小笠原が立っている。

小笠原「それでは、乾杯のご挨拶は、石崎彦兵衛の娘婿、石崎勝利が務めさせていただきます

す」

壇上に上がる、石崎勝利。そっとポマードをつけた髪を撫でる。
マイクの位置を調整して、

勝利「ただいま、ご紹介にあずかりました、石崎勝利と申します。おかげさまで石崎和子さんと結婚して半年が経ちました。(おめでとー) ありがとうございます。本日はですね、えー、義父(ちち)、石崎彦兵衛をはげます会にお集まりいただき、ありがとうございました。えー、乾杯の発声の前にですね、私から一つご報告があります(会場、おお)。あちら(と、和子の方を手で示す)。あちらに、私の最愛の妻の和子がいます。えー、それとですね、実は、もう一人、あちらに本日のこの会を祝っているものがあります(会場、えー)。えー、この度、子供を授かりました(会場、歓声、拍手、おめでとー、など)。ありがとうございます、ありがとうございます。えー、これからもですね、(おめでとー) ありがとうございます。これからも、妻和子、それから、これから生まれてくる子供とともに頑張ってまいりたいと、そう思っております。誠に恐縮ですが、私からのご報告でした。えーと、それでは、みなさん、グラスはご用意できましたでしょうか？えー、これからの石崎事務所のますますの発展を祈願して、乾杯(かんぱい、後、拍手)！」

○外、静かな場所

小笠原、ガラケーのディスプレイを確認し、画面を閉じ、二つ折りに。
そこへ、布川がやってくる。

布川「どうも」

小笠原「やあ、どうも、どうも」

布川「どうも、布川です」

小笠原「あ、名刺、名刺」

名刺交換をする二人。

小笠原「石崎の公設秘書の小笠原です」

布川「社会部の布川です」

小笠原「わざわざありがとうございます」

布川「いえ」

小笠原「今日は、角田さんのとりはからいで」

布川「ええ。角田とは同期です」

小笠原「そうでしたか。あれですか、ずっと社会部？」

布川「いえ、文化部とか。あと、消費部って、消費面とか書いてるところか。地味なところばかりで」

小笠原「ああ、そうですか」

布川「ええ。政治部には、頭が上らなくてね」

小笠原「そうでしたか。こちらも角田さんにはね、いろいろといじめられましたからね」

布川「ああ、あいつは、結構、空気の読めないところがありますからね……。大物の政治家でもぐいぐい行くんですよ」

小笠原「ええ」

小笠原「布川さん、ほら、ここじゃ暗いでしょ。さあ、二人っきりで話せる場所へご案内しますよ」

布川「そうですか」

小笠原「ええ。こんな夜に二人で立ち話してたら、怪しまれますからね」

二人、去る。

○料亭

小笠原、布川にお酌をしている。

小笠原「ま、ま、呑んでください」

布川「ええ」

小笠原「今日は、私が持ちますから…」

布川「いやいや」

小笠原「それより、本題に入りましょう、本題に」

布川「ええ」

小笠原「ほら、これ」

小笠原、紙袋を出し、紙袋に入ったレコーダーを出す。

小笠原「このレコーダーに、選挙のときの顛末が、ほとんど入ってます」

布川「そうですか」

小笠原「声、聞いていただいたら、分かると思います」

布川、少し流し、耳をあてる。

布川「石崎市長だ」

小笠原「ええ。偽物じゃ、ないですよ」

布川「ええ」

小笠原「もしあれでしたら、声の鑑定をしてもらっても、かまいません。まあ、話している内容で、本人以外っていうことはありえませんか」

布川「わかりました」

布川、鞆にレコーダーをしまおうとする。

小笠原「あ、これ（と、紙袋を持ち）」

布川「あ」

小笠原「紙袋、要りませんか？」

布川「あ、じゃあ、そうですね」

布川、紙袋にレコーダーを入れて、傍に置く。

布川「ありがとうございます」

小笠原「石崎市長と対立しているダム建設反対派のリーダーに山本っていうのがいるんですけど、実はその息子の勝利って、石崎の娘と結婚して石崎家に婿入りしたんです」

布川「ええ、そうなんですか」

小笠原「そう。元々、石崎の娘とは高校の同級生だったみたいですけどね」

布川「そんなことがあるんですね」

小笠原「ええ。でも、ちょっと裏があるんですよ。その婿入りした勝利は、かつてウォーターサーバーの会社を経営してたんです。このあたりの山から採れる天然水を使った、美味しい水だって。それで、わりと順調にいったみたいですよ」

布川「はあ、そうなんですか」

小笠原「ただね。ほら、風評被害で」

布川「ああ」

小笠原「それっきり、ぱったりと売れなくなっちゃって。一時期は東京に支社もあったみたいですけど。それも閉じて、最終的には破産しちゃったってことになってるんです」

布川「破産しちゃったってことになってる？」

小笠原「ええ」

布川「してないんですか？」

小笠原「ええ。その借金をね、全部、石崎が返済してあげたんですよ。補助金を使って」

布川「それ、本当ですか？」

小笠原「ええ。それが入ってるんです」

布川「え？」

小笠原「ええ、そのレコーダーに。私と石崎と、山本、勝利ですね、三人で打ち合わせた内容もありますし、私と山本、二人で話した内容も入ってます」

布川「そうですか。あとで、聞いてみます」

小笠原「ええ。確認してみてください」

小笠原「で、いま、山本の会社、社名も変わってるんですけど、実はまだあるんですよ」

布川「え」

小笠原「売れ残った、ウォーターサーバーの水あるでしょ。あの水のパッケージを入れ替えて、売ってるんです。天（あま）の水（すい）っていうんですけど」

小笠原「それね、いま、石崎夫人がほうぼうで支援者に売りつけてるんですよ。健康食品みたいに」

布川「ほんとですか？」

小笠原「ええ。石崎夫人って変わった人で。何かと神様とかいうんですよ。神様が見てるとかって。なんでも神に結びつけちゃうんです。で、その水も、なんかよくわかんないですけど」

ど、スピリチュアル的なものと結びつけて・・・」

布川「そんなもの、買う人いるんですか？」

小笠原「さあ。在庫が減ってるから、多少は売れてるんじゃないですかねえ」

布川「そうですか」

小笠原「それで、話を戻すと、勝利は借金と引き換えに和子との結婚したんです」

布川「ああ」

小笠原「いわゆる分断っていう手法です」

布川「なるほど」

小笠原「でもね、和子は、勝利のことが最初から好きだったみたいなんです」

布川「そうですか」

小笠原「そこに目をつけたのが、石崎一家の汚いところ、ですよ」

布川「一家？」

小笠原「ええ、石崎夫人も二人の縁談にかんているらしいんですよ」

布川「なるほど」と、顎ひげをなでる。

小笠原「ねえ、布川さん、(布川をみつめ) 私はね、あなたにスクープを取ってほしい」

布川「はい」

小笠原「やっぱりね、悪は、いつか負けなければいけない。いつも悪が勝ってたら、つまらないでしょう？」

布川「ええ、その通りだと思います」

布川「あの、でも、これ、出してしまうと、小笠原さん自身も相当危うくなるというか、まあ、恐らく、逮捕くらいは覚悟しなくちゃいけないんじゃないですかね？」

小笠原「ええ」

小笠原「布川さん、今日はどんどん呑んでください」

布川「ええ、ありがたく」

小笠原、布川にお酌する。

小笠原「それでは、これからの僕たちの親密な関係に」

小笠原、杯を持ち上げて、ウイंकする。

布川、だまって杯を持ち上げる。

○夜道

小笠原と布川、肩を組んで、千鳥足で歩いている。

小笠原「布川さん、がっしりしてますね」

布川「あ、そうですか」

小笠原「ほら、学生時代、なんかやれてたんですか」

布川「ええ。水球なんですけど」

小笠原「水球？」

布川「ウォーターポロって言って、ヨーロッパとかでは人気あるスポーツなんですよ」

小笠原「ウォーターポロ？」

布川「そうそう。ポロって、ほら、馬に乗ってやる、ホッケーみたいな」

小笠原「ああ、ポロね。ポロシャツの、ポロ」

布川「そうです。縫い付けられているでしょ、マーク」

小笠原「いやあ、しかし、うれしいな、こうやって知らない人と仲良くなれるなんて」

布川「ああ、そうですか」

小笠原「あ、でも、僕の家は、ほんとすぐそこなんで、歩いて帰れるので」

布川「いや、だって、こんなじゃ」

小笠原「いやいや、大丈夫。それに、誰かに見られたら」

布川「私のことなんて、誰も知りませんから」

小笠原「いやあ、誰が見てるか分かりませんから」

布川「まあまあ」

小笠原「あのね、布川さん」

布川「どうしたんですか？」

小笠原「僕ね、なんか、今日、いいこと言ってませんでした？」

布川「え、どうでしょう。うーん、たぶん？」

小笠原「布川さんって、だいたい煮え切らない人ですね」

布川「え、煮え切らない？」

小笠原「ふふ、煮え切らない布川さんのこと、僕、好きですよ」

布川「え、何言ってるんですか」

小笠原、ぐったりする。

布川「あ、お月さんだ」

小笠原「ん？」

布川「小笠原さん、きれいなお月さんが出てますよ」

○石崎事務所、夜。

一人、勝利、居残って明日への準備をしている。

勝利、手帳をめくりながら、

勝利「明日は、10時から挨拶まわり、15時ポスター貼り、えーと、街頭は12時か…（書き込む）、夜は、島本さんと懐石…」

息を吐いて、手帳を机に投げる。

おもむろに大きな窓ガラスの前に立って、自分の写る姿を確かめている。

髪を整えながら、

勝利「大事なものは、髪型より、表情か…」と、両手で口角を上げる仕草をする。

おじきをしながら、そこにはいない握手相手を見つめて、

勝利「ありがとうございます」

握手。両手で包みこむように、重ねていく。

何度か繰り返し、練習する。

そこへやってくる、小笠原。

小笠原「お、こんな遅くまで」

勝利「あ、小笠原さん、おつかれさまです」

小笠原「そのウインドブレーカー、似合ってきたね」

勝利「そうですか？」

小笠原「ライムグリーン、よく似合ってるよ」

小笠原、手を差し出す。

勝利「ありがとうございます」と支援者にするように握手。

小笠原「そうそうそう」

小笠原「ちょっと、勝利くん。話したいことがあって」

勝利「はあ」

小笠原「あのさ、僕、もう少ししたら捕まっちゃうんだ」

勝利「え？」

小笠原「まずいことになっちゃって」

勝利「え、どういうことですか？」

小笠原「いやー、勝利くんの」

勝利「ええ」

小笠原「会社」

小笠原「あれ、マスコミにリークがあって、税金使ってるの、ばれちゃったみたいなんだよね」

勝利「うそ」

小笠原「ううん」

勝利「うそですよ？」

小笠原、首を振る。

勝利「え、僕は？」

小笠原「いやあ、だからさ、勝利くんも、けっこうやばいんだよ」

勝利「はは」

小笠原「どうにか僕だけでおさめてみようと思うけどね、もうかしたら…」

勝利「僕も？」

小笠原「うん」

小笠原「長年、秘書生活を続けて来たけどね、勘っていうのかな。かなりの確率で…」

勝利「ああ」と、頭をかかえる。

小笠原「勝利くん、逮捕される前に身を隠しなさい」

勝利「はい」

小笠原「逃げ切れたら、勝ちだ」

勝利「はい」

小笠原「山奥の方は、まだ人が戻ってないから」

勝利「はい、わかりました」

勝利、去っていく。

○山本の家、縁側

山本、縁側でお茶を飲んで、遠くの山を眺めている。

そこへ、市民3が新聞を持ってやってくる。

市民3「憲さん、憲さん」

山本「おう」

市民3「新聞みたか？」

山本「ん？どうした」

市民3「ほら、ここここ」

山本、記事を読む。

山本「…」

市民3「石崎市長の秘書が捕まったあとは、次は勝利くんだって」

山本「なにやってんだあ」

山本「ばかやろう」

山本、ため息をつき、深呼吸をし、目をつぶる。

○石崎家の仏間

仏壇に向かって、ぶつぶつと何かを祈っている石崎ナツ。

かたわらには、お腹をさすりながら座っている和子。

和子、ゆっくりと団扇を仰ぎながら。

静かな時間が流れる。

○山中

雨のなか、逃げる勝利。

勝利、だんだんと息が荒くなっていく。

勝利、木の根っこにつまづいて転げる。

うつ伏せのまま、泥まみれになる勝利。

しばらく、うつ伏せのまま動かない勝利。

そこへ幻視のように現れる、山本と老人。

老人は二人から遠く離れたところで、やはり笑顔で顎のあたりを触っている。

山本「一人で行っちゃだめじゃないか」

勝利「お父さん」と、顔をあげる。

顔についた泥や雨をぬぐう勝利。

山本、ゆっくりと勝利を抱き起す。
抱き起こしたのち、山本、ゆっくりと去っていく。
老人もまたいつの間にかいなくなっている。

呆然と立ちすくむ、勝利。